

〔研究ノート〕

## 演習クラスにおけるネットワーク形成

越 智 祐 子

名古屋学院大学経済学部

### 要 旨

減災教育では、自助および共助の重要性が指摘される。共助は「地域コミュニティ」と置き換えられることが多いが、授業は必ずしもコミュニティとして（あるいはコミュニティ内で）おこなわれるわけではない。実践的な減災教育において、学生はどのように共助の重要性を学ぶことが可能なのか、共通教育科目を題材に検討した結果を報告する。

キーワード：減災教育，演習，コミュニティ，ネットワーク

## A report of networking in practical education

Yuko OCHI

Faculty of Economics  
Nagoya Gakuin University

---

発行日 2017年7月31日

## 1. はじめに

災害発生時、初動の段階で人々の生命を救うのは自助と共助だと言われる。公助は間に合わないことが過去の事例から強く示唆されるからだ。そこで一般に、自助力を高めるために、家屋の耐震補強や家具の転倒防止、非常持ち出し袋の整備が推奨され、共助力向上のためには、日頃から地域のつながりを密にすることが推奨される。この「地域のつながり」は、たいていの場合「コミュニティ」として語られる。つまり、減災を進める上で、地域におけるコミュニティの形成は重要だ、とされているのである。

一方、本学でも減災に関する諸活動や教育がおこなわれており、自助・共助の重要性についても指摘されている。共助の重要性を語るならば、アクティブラーニングで実施される演習において、共助への関心を喚起し、確かに重要だと理解でき、受講生が実践してみる場が必要だと考えられる。一般に「共助＝コミュニティ」ととらえられているところから、このことは具体的には、演習内にいかにコミュニティに関する学びを組みこむことが可能かという問いになるだろう。

しかし、学生が自主的に取り組む部活動等の課外活動は別として、大学における教育プログラムは通常、コミュニティとして(あるいはコミュニティ内で)実施されるわけではない。むしろ、演習科目の受講生集団とは、単位獲得を共通目的とするアソシエーションだと言えよう。個人の知識の学修にウエイトを置いた座学形式の授業では、「コミュニティが大切だ」と主張する学びの場自体が、コミュニティである必要は必ずしもないと考えるが、アクティブラーニングとして展開する演習形式の授業では、コミュニティの形成が重要だ、という命題とどのようにつきあえばよいのだろうか。

減災に関わる演習授業とコミュニティとの接近について整理を試みると、①「コミュニティ」は自分たちの学びとは無関係のものとして扱い、観察者として学ぶ、②何らかの方法によって授業を「コミュニティ」として成立させ、当事者として学ぶ、③「コミュニティ」とは異なる集団のかたちで実施し、「コミュニティ」以外の集団の可能性を示す、に大別できよう。本稿では、このうちの③「コミュニティ」とは異なる集団のかたちで実施し、「コミュニティ」以外の集団の可能性を示す、を前提に、演習授業が展開する「学びの場」がどのように機能しているのかを考察し、教育の場における学生の相互作用の可能性について検討する。

## 2. 研究の背景

改めて、「コミュニティ」とはなんだろうか。社会学はコミュニティに大きな関心を寄せ、議論を重ねてきた。コミュニティの定義は論者によって様々だが、George A. Hillery (1955) によれば、その構成要素は「地域性」と「共同性」に整理できる。地域性については、現代はインターネット上にも「解放」されており、必ずしも地理的な一続きの空間のみを意味しているわけではないが、集まることのできる場所が(地理的か、あるいはインターネット上かを問わず)存在して、実際につながりを持ち、社会的相互作用をおこなう集団ということになるだろう。このとき、共

通の関心の有無に関わらず共同するところから、緊密あるいは親密なつながりが前提される。コミュニティとよく対置されるのは「アソシエーション」だが、こちらは共通の利害や関心のために結成される人為的・機能的集団である (MacIver 1924 = 1977)。したがってこの2つの概念は、相互に排他的な概念というわけではなく、コミュニティ内に存在するアソシエーションも当然存在する。

コミュニティであれアソシエーションであれ、個人や組織同士のつながりの有無や密度等に注目して記述すれば、どちらも社会的ネットワークとしてとらえることができる。たとえば、コミュニティは、地域性によってメンバーを見分けることのできる、緊密なネットワークだと考えられる。

### 3. 授業概要

本稿で考察の対象とするのは、名古屋学院大学が2014年度から開講している「減災福祉まちづくり演習」である。この科目は1 Semester 2単位で修得させる全学共通教育科目で、筆者が担当している。大学および自分たち学生を、地域の一員であると同時に社会資源ととらえて、地域の減災福祉まちづくりの課題に学生の視点を活かして取り組む、という主旨でPBL形式の授業をおこなっている。ここでは、2016年度秋学期開講の「避難生活のリアル」プログラムの受講者集団（登録上は16名だが、1名は一度も出席していないので、実質的には15名）を取り上げる。

「避難生活のリアル」プログラムは、静岡県が開発した「避難所運営ゲームHUG」を出発点として、自分たち大学生くらいの年齢層が関心を持てるような減災意識啓発コンテンツを作成することをゴールに、2016年9月から2017年1月までの半年間展開した。主な学習内容は、①障がい疑似体験、②避難所の実際ならびに運営に関する講義の受講、③一次避難場所から指定避難所への移動ルートをまちあるきにより確認した上での、大学近隣地域の避難所開設訓練参加、等である。これらの学習結果を用いて、避難所生活や運営について、多様な避難者がやってくるイメージを想起させる内容の対戦型カードゲームの企画制作をおこなった。完成したゲームは、2017年1月21日に開催された熱田区防災公開講座で展示された。ここまでの、授業担当者が当初計画した授業のゴールである。より具体的には、大学生くらいの若年世代が関心を持って取り組めるコンテンツを、避難者の多様性を強調するかたちで避難所運営ゲームHUGを出発点として制作し、完成品を防災公開講座で披露することが、授業担当者の設定したゴールだった。本科目は、与えられた情報や修得した知識に加えて、受講生が自らの得意分野を持ち寄り、協力し合って進めていく必要があることから、演習の履修者集団は、成果物の質を高め、無事に単位を修得することを目的とする期間限定のアソシエーションとしてスタートしたと考えてよいだろう。

しかし実際には、成果物であるカードゲームは別の講座で試行された他、2017年3月5日に本学で開催された「ワクワクおやこ春まつり」でも展示された。さらに「ワクワクおやこ春まつり」では、より低年齢の子どもたちが取り組めるようにアレンジしたゲームが、受講者有志により作成、実施された。授業期間や標準学習時間を大幅に超えて、目標を上回る学修達成がみられたこ

とは、授業担当者にとっては驚きであった。

#### 4. 関係の形成過程の把握

半年間の学修のなかで、学生同士のつながりはどのように変化したのかを把握し、そこから集団の特徴を考察するために、授業の最終段階を迎えた1月に、受講者15名に対して質問紙調査を実施した。調査は、インターネット上のサービス、具体的には、グーグルフォームを利用して質問を設置し、回答用URLを送付して協力を求めた。

主な質問内容は、①授業開始時に顔と名前が一致していたのは誰か、②授業中盤の11月に開催した昼食会で、同じテーブルだった人は誰か、③授業をきっかけとして親しくなったと現在感じているのは誰か、④自分と意外な共通点を持つことがわかった人は誰かについて氏名を尋ねるものと、トレーディングカードゲームへの関心の程度と実際のプレイ経験（総プレイ時間数）を尋ねるものである。記名式の調査で個人名を書いてもらうことから、次の説明をおこない理解を求めた結果、13名から協力を得た。説明内容は、学修の場でどのように学生間の関係が形成されていくのか、その集団の特徴を知る趣旨で実施すること、結果は授業担当者のみ閲覧し、すぐに記号化すること、記号化した後の結果は公表することである。結果は、受講生個人をノードで、双方向に名前が挙がった場合にタイで記述し、平面上に配置した。

#### 5. 結果と考察

調査協力者13名について、授業集団内のつながりかたの推移は次の結果となった。まず、授業初回に、どの程度顔と名前が一致する人がいたのかを尋ねた結果は、図1に示すように、2組の3者関係と、2対の2者関係で、タイは7本あった。彼らは友人同士で示し合わせて受講したわけでは必ずしもなく、教室に来たら偶然知り合いがいた、という場合もある。いずれにしても受講者たちは、クラス内に3名以上の知り合いがいない状況から学び始めた。担当者は、クラス内の対話を促進し、集団意識を醸成するために、グループワークを課す際には、なるべく話したことのない相手と組むよう促し、授業を展開した。

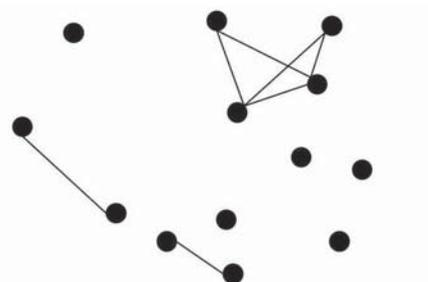


図1 授業開始時のつながり

授業開始から2ヶ月が経過した11月に、インフォーマルな交流を促進する目的で、大学内カフェでの昼食会を企画した。授業回は7回目にあたり、ちょうど折り返し点である。お昼休み実施の昼食会は当然正課ではないが、部活動で来ることができなかった1名を除いて全員が参加した。

昼食会にはもうひとつ、教室の臨時変更による遅刻を防止する意図もあった。ゲストスピーカーの都合で、教室を臨時に駅前の校舎に変更した。駅前の校舎は昼食を取ったカフェの入っている校舎で、日頃使用している教室から徒歩15分程度かかる。昼食をカフェで食べた後、そのまま全員で教室に移動し授業を開始することを企図したのである。結果、教室の勘違い等による遅刻者はなく、スムーズに授業を始められている。

一方で、主たる目的であったインフォーマルな交流促進はどうだったかと言えば、図2のとおり、誰と一緒にあったかを互いにほぼ記憶していないという結果になった。4人ずつのテーブルを作成したので、人数が多すぎたということはない。あらかじめくじを作成し、到着した者から引いてもらい、テーブルを割り当てた上、「後で誰と一緒にあったかを尋ねるので、覚えておくよう」指示した結果なので、実際に尋ねたのが実施日の2ヶ月後であったことを考慮しても、昼食会ならびにその際の雑談は、ほとんど受講生の印象には残っておらず、集団形成には役立たなかったことがわかる。

授業最終段階の1月のようすについて、授業をきっかけとして親しくなったと自分が感じる相手について尋ねており、その結果は図3のとおりである。今回追加したタイは、個人が親しくなった、と感じる相手に関する主観を尋ねているので、一方向のみでも描画していることに注意して、検討する。

集団内のやりとりが一気に加速したのは、11月に実施された、近隣学区の避難所開設訓練に参加した後からである。このとき、熱田区役所の企画で、避難所運営ゲームHUGを実際に学生や地域住民が演じる、いわば「リアルHUG」とも言うべきゲームがチーム対抗型でおこなわれた。このゲームは学生の関心を非常に喚起した。この体験が刺激となって、自分たちが組み立てたい内容が明確になったことから、検討内容が具体的なものとなり、作業が進んだものと思われる。

作業は、放課後等にも有志で続けられた。自宅で考案してきたアイデアを、授業時間中にクラスに示す者も出てきた。休憩中や単純作業中に雑談をしたり、アイデアを話す過程で過去の自分の経験を引用したりするなかで、お互いに親しみを感じる関係性が徐々につくられてきた。

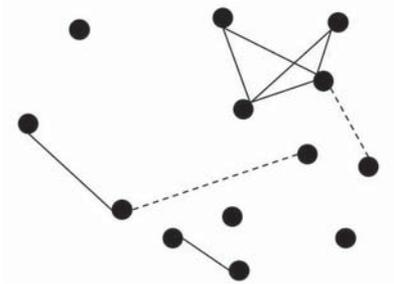


図2 授業中盤時のつながり

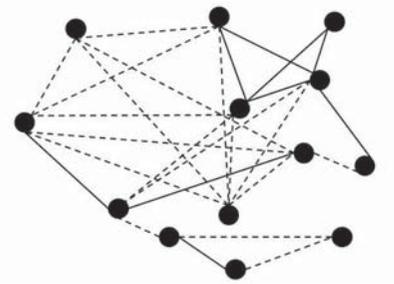


図3 授業終了時のつながり

授業が終了すると、現在のような密度では関わらなくなるため、この関係を維持すべく「みんなでご飯に行こう」「サークルをつくったらどうだろうか」と言った提案もなくはなかったが、実行には至らなかった。解決すべき課題に協働で取り組むために結社することが一義的な目的ではなく、集団のメンバーに親しみを感じ、なかま意識を持つ…これはコミュニティの萌芽と言ってよい。実際にコミュニティが形成されるには至らなかったが、ネットワークが形成されることで、課題解決が加速することは学修された。また、ネットワークの密度が高くなると、そこに親密性を有するコミュニティが形成されることも強く示唆される。

以上のように、半年間の演習における受講生集団は、コミュニティとしては成立しなかった。しかし、緩やかなネットワークは形成された。今後、また別の共通課題等のきっかけがあれば、再度つながることは、授業開始前と比較すると、きわめて容易になったと考えてよいだろう。

## 6. おわりに

授業開始当初ほぼ知り合いのいない共通教育科目で、学生たちはどのように集団を形成するのかをみてきた。クラスは、単位獲得のために協力するアソシエーションとしてスタートし、最終的には楽しんで作業をともにおこない、情報や意見の交換をするネットワークとして機能するに至った。このとき、交流を目的としたランチ会はあまり効果的ではなく、むしろ演習で設定された共通の課題を通じてインフォーマルな交流が生まれ、学生のネットワークが形成されていた。このことは、受講生によって「授業中に授業以外の話をし、授業外に授業の話をする関係」と表現されている。

従来の「地域コミュニティ」のイメージは、先行するコミュニティがあって、共通の課題が発生したときに、コミュニティで解決するというものではないだろうか。だからコミュニティが重要だとされ、日頃から帰属意識や親密性を保持できるような関係づくりが推奨されている。しかし現代は、人々の流動性の高い、変化に富む社会である。状況にあわせた地域づくりが必要だ。

本稿では、演習授業を題材として、バラバラな個の集まりからネットワークが形成されるプロセスを検討した。親密性は、単なる交流のなかではなく、課題解決のプロセスのなかで生まれていた。同時に、課題解決の促進は、共通の目標や体験の共有から生まれる親密性を背景に加速していた。これは、先行する課題からネットワークが形成され、コミュニティへと発展しうることを示唆している。従来の地域コミュニティによる課題解決イメージとは逆のプロセスだが、従来の地域コミュニティに必ずしもなじみのない年代にとっては、比較的入りやすい、共助への入り口ではないだろうか。

本稿では検討できていないが、親密性をともなうネットワーク形成には、共通課題の設定だけでなく、集団外の人々との交流が重要なカギを握ると思われる。たとえば今回の事例で言えば、防災訓練で住民の方々をはじめとして、ボランティアの方々や区役所の方々が、学生を一人前の参加者として扱ってくださった。当日は「楽しく防災に取り組む」という話題で、マスメディアの取材もあった。自分たちの活動が誰かの関心を引き、誰かと関わりを持っているということ

感じられる機会は、学生たちにとって大きな刺激だったようだ。今後は、集団の外部からの働きかけの影響等についても検討したい。

## 文献

- Hillery, G. A., 1955, "Definition of community: Areas of agreement", *Rural sociology*, 20(2), 111-123.
- MacIver, Robert M., 1924, *Community: a sociological study: being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life* (= 1977, 中久郎, 松本通晴監訳『コミュニティ：社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』ミネルヴァ書房.)

## 付記

本稿は、2017年1月21日に開催された「熱田区防災公開講座」における筆者の口頭報告をもとに、大幅に加筆修正したものです。

授業にご協力いただきました熱田区役所総務課、あつた災害ボランティアネットワーク、認定NPO法人レスキューストックヤード、名古屋都市センターのみなさまに厚く御礼を申し上げます。あわせて、すごくがんばっていた受講生のみなさんにも、賛辞と謝辞を伝えます。ありがとうございました。